

星になぐ道*目次

一	ときめき	5
二	隠し撮り	23
三	青海原	40
四	育子からの手紙	59
五	就職差別	78
六	仲間	97
七	教員失格	116
八	孤独	135
九	棘	154
十	赤い水	174
十一	体罰という毒	193
十二	沈み橋	213
十三	道、遙か	234

愛することの、喜びの、真理を把握することの経験は、
時の中で起こるのではなく、
今、ここで起こる。

——エーリッヒ・フロム『生きるということ』

一 ときめき

退学したくない。伸二は一心にそう思った。腕時計を見ると、まだ三時前だった。学生会館の一室に、長机が四角に並べられている。その入り口に近い席で、伸二は会議の始まるのを待った。

奥の方に数人の女子寮生、手前に二人の男子寮生がすわっている。アメリカはベトナムの集落を焼き、幼い子どもまで殺している、B52が沖縄からベトナムへ飛び立っている、ひどいな。男子寮生はそんな話をしている。

伸二は窓の外へ視線を移した。京都の冬は穏やかだ。縦に細長い窓辺は冬の陽光に包まれている。

伸二はこの大学に第二希望で入学した。卒業生の七割が教員になり、外は官庁や出版社などに就職する大学だ。講義をたくさん受け、アルバイトをこなす。地味で単調な生活。その全てに満足しているわけではない。が、不満のない生活などあるはずがな

い。堅実な生活に徹し、卒業し、就職したい。伸二はそう思っている。

ところが、卒業まで一年あまりというときになってから、思わぬことが起きた。大学側が寮の管理規則を変えようというのだ。新しい管理規則には寮費を上げるという一文がある。アルバイトと奨学金だけでまかなうぎりぎりの生活。寮費が上がっても、学生生活を続けられるだろうか。不安だった。

新しい管理規則の対策委員会に加わってほしいと、男子寮長から頼まれたときは迷った。これまで自治会や寮の役員などとは距離を置いてきたからだ。が、考えた末に、引き受けた。寮費を据え置くために何とかしなければならぬと思った。

伸二は窓から視線を戻し、腕時計を見た。定刻が迫り、寮生が次々に入ってくる。室内は二十人ほどの寮生で埋まった。

毛利哲也が入ってきて室内を見回し、伸二の傍へ近づいた。

「林、早いな」

毛利は声をかけ、隣にすわった。入学して二年間、彼は寮で伸二の相方だった。

鉄人と呼ばれているが、よく締まった厚い胸、筋をとおす雰囲気が、その名を呼んだのだろう。

伸二はもう一度腕時計を見た。そのとき、女子寮生の声が耳に飛びこんできた。それはいいわね。優しい声だ。誰が言ったのだろう。

数人の女子寮生が真向かいの席に並んでいる。一人の女性に、伸二の眼は引きつけられた。ブルージェリーのカーディガン、白いブラウスの襟。ほっそりした姿態。それはいいわねと言ったのは、その人のように思われた。

やっと長身の男子寮長が入ってきた。彼が前に立ち、会場を見回すと、私語がやんだ。

「少し遅れましたが、男子寮と女子寮の合同対策委員会を始めます。まず、自己紹介をお願いします。女子寮の寮長からよろしく」

男子寮長はきれいのいい口調で言った。立ったのは、伸二の眼を引きつけた女性だった。ブラウスの白い襟がくつきりと際だち、まぶしい。

「まつのいくこです。二回生です」

それはいいわね、という先ほどと同質の声。急に胸が騒いだ。

を聞いている。

話し合いはこれからのことに移り、学生課と団体交渉を行うことが決まった。京都市内で開かれる寮問題研究会の日時や会場について、男子寮長が説明した。

くだけた声がいき交う。いつのまにか、伸二の視線はまつのいくこに吸い寄せられていた。カーディガンの袖口から見える細い手首、ふっくらした頬のまるみ。窓から射しこむ夕陽が彼女を包んでいるが、いくら夕陽は陽光を強めても、彼女を染めきれないだろう。彼女の内側にある生硬なもの、夕陽を撥ね返してしまふ。そんな風に感じられる。

男子寮長が彼女の方へ寄った。そちらへ毛利も歩き、幅広い体で彼女の姿をさえぎった。打ち合わせでもしているようだった。

もう少し、この場にいたいと思った。が、腕時計に目をやると、アルバイトの時刻が迫っていた。

学生会館の外に出て木蓮の若木の傍で足をとめた。早くも枝先に蕾が付き、亜麻色に輝いている。伸二は玄関を振り返った。人の姿はなかった。

正門の方へ歩き始めると、夕陽の色はいっそう濃

まつのいくこがすわり、隣の女子寮生が立った。赤い毛糸の帽子をかぶった彼女は一回生だと言った。まつのいくこは彼女に優しい眼を向け、ときおりうなずいている。

まつのいくこという字を想像してみる。姓は松野か。いくこはどう書くのだろう。先刻、優しげに見えた。が、今、引き締まった顔を真つすぐ前に向け、理論的な雰囲気を漂わせている。

寮生たちの自己紹介が続いた。彼らはたいいてい、新しい管理規則に対する不満、仲間のすばらしさを語った。語調まで似ている気がした。

自己紹介の最後に伸二が立った。

「林伸二です。これまで自治会や寮の役員をしたことはありません。が、今回、寮費が上がるのをストップさせるために対策委員を引き受けました」

伸二が言うと、会場は静まった。

話し合いが始まると寮生の発言が相次いだ。

まつのいくこも報告をした。やわらかい声に切迫感が含まれ、化粧気のない顔からひたむきなものが伝わってくる。隣で、赤い毛糸の帽子をかぶった一回生がしきりにうなずきながら、まつのいくこの話

く、木々も学舎も西色に染まっている。

夜十時までの五時間、パン工場で菓子パンの袋づめをした。終わって外に出ると、急に疲れを感じた。気の抜けていくさだ。伸二は深い息をはい

寮のどっしりした石柱の門を入ると、広大な荒地が広がり、三方の隅に細長い平屋が建っている。男子寮だ。旧陸軍の兵舎跡の寮、まるで車輪を失った貨車が繋がれているかのようだ。くすんだ色の三棟の建物が東寮、西寮、北寮だ。伸二は北寮にいる。北寮から少し離れて旧陸軍の馬屋跡が藪に一つだけ、置き忘れられたように残っている。その南側にある空き地は掘り返され、ブルドーザーが置かれている。

馬屋跡の向こうに女子寮が見える。クリーム色の新しい二階建て、広い窓に灯が点いている。四人部屋が四十室あると聞いた記憶がある。

ふいにまつのいくこの顔が浮かんだ。会議室で夕陽を受けていた顔。彼女はどの部屋にいるのだろう。

女子寮に背を向け、枯れ草の残る荒地を歩いた。寮室へ戻る前に洗面所へ寄り、冷たい水で手と顔を洗い、染みついたバターやクリームの匂いを丁寧に落とす。ハンカチで顔を拭く。指先を見ると、赤らんでいる。その赤らみが、なぜか自分をとり戻させる気がした。

伸二は自室へ帰った。八畳足らずの二人部屋。外へ押し開く縦長の窓が一つだけ。四十ワットの電球を点けたが、天井や床の隅に冷え冷えとした闇がまだ残っている。奥の両脇に二つの兵隊ベッド。その間は人が一人やっと通れるほどしかない。粗末な本箱と机と椅子が廊下側に押しつけてある。

本箱から学生名簿をとり出し、立ったまま、ページをめくった。松野育子、国文学科二回生、出身地は九州の南端、海辺の町、並地町だ。いくら眺めても、それ以上のことを語らない活字がもの足りなく感じられる。

堅い木の椅子に腰を下ろし、伸二は過去に魅かれた女性たちのことをたどりはじめた。

初恋は小学生のとき、故郷の町にただ一つしかない医院の子。黒い髪を肩のところできり揃えていた。すぐに吸う音のしない、はき出す音だけの寝息が聞こえてきた。

去年の春、曾根は入学してきた。工業専門学校を卒業してから四年間働いていたといい、他の学生にない落ち着きを身につけていた。涼しい眼、力の入った濃い眉。体は小さいが、病気が知らずだと言った。きびきびとした身のこなし、傍目にも疲れを知らないように見えた。掛け持ちでいくつもアルバイトをし、家へ逆仕送りをしていた。学園祭や寮の運動会にとき、見かけることはなかった。

ふいに曾根が咳きこんだ。胸の深いところから出る咳だ。体を折り曲げ、眉間に縦皺を寄せている。伸二は追い立てられる気がして立ち上がった。椅子が堅い音を立て、曾根の咳はやんだ。伸二は足音を立てずに窓辺に寄り、細長い窓にきりとられた外の闇に眼をこらした。

なぜか、父親のことが浮かんでくる。父は暗い時代を背負い、戦争と貧困の中で馬車馬のように生き、自分が父とはちがう。そんな時代とには無縁、新しい途上にいる。採用試験に合格し、誰にも認められる卒論を書き、就職する。必ずそうしてみ

た。中学のとき、数学の得意な同級生。授業中、斜め前の白いうなじを見ていた記憶がある。高校のとき、詩を書く隣町の下級生。道ですれちがったことがあった。大学に入学した年、同期生の時子。ジパンの後ろポケットに、文庫本を覗かせていた。時子だけは言葉を交わしたことがある。

廊下で足音がしたので、伸二は現実には引き戻された。戸が開き、相手の曾根直人が帰ってきた。彼は机の前に進み、飲みかけの湯飲み茶碗を手にとってひと口含んだ。

「曾根君、今日も遅くなったな」

彼はため息混じりに何か応えたが、言葉は聞きとれなかった。最近、彼は無口になった。唇の薄皮が乾き、狭い額に疲れがぎっしり溜まっているように見える。

「今日、新しい管理規則の対策委員会を開いたよ。女子寮と合同だった」

彼は黙ってうなずき、湯飲み茶碗を戻した。

ベッドの方へ歩く姿が話しかけられるのを拒んでいる。脱いだ靴をベッドの下に押しこんだが、着替えず、重い疲労を投げ出すようにベッドに横たわっ

せる。

が、頭の片隅に引っかかっているものがある。寮の新しい管理規則。臥している曾根。堅実な生活を揺るがすもの。その存在が間近に感じられ、不安がすすめる。

生活を脅かすものに、つぶされるわけにはいかない。守ってきたものを譲り渡すわけにはいかない。絶対に負けない。

いつのまにか、日本海側の小さい港町、故郷の仙浦せまに意識が及んでいく。

京都の大学へ出発する早春の朝、伸二が起きていた。父は飯台の前ですわっていた。

祭でもないのに、巻き寿司が飯台の大皿に載っていた。海苔が黒く光り、切り口から人参やかんぴょうや玉子焼きがツヤのある色を見せている。

母のイネが土間にある井戸でポンプの腕を動かした。水がほとばしり出る。イネがががんで鍋を洗い始める。使いこんだヘチマだわしを水につけてこすり、パケツを傾け、洗い流す。耳に馴染んだ水音。湯気の立ちこめる炊事場で、イネの手首や手の甲が水に濡れて赤らみ、裸電球の光を照り返している。